

この田舎俳句祭は参加した多くの俳人はもちろん、地元・運営側の惜しみない努力の上に成り立つている。たった四人の職員でこの俳句祭の準備を進めるのはとても大変で、俳句祭の前の週は休み返上で毎日準備をしていたという。苦しいこともあるが、やるからには参加者に満足して帰ってほしいという思いが運営をしてくる職員の原動力となっている。いわばこの俳句祭は「手作り」で出来ている。「この俳句祭が無ければつ

「こもろ・日盛俳句祭」もいよいよ最終日だ。三日間天候にも恵まれ、三十度を超える暑さの中多くの人が訪れた。今年は新たな企画として循環シャトルバスや高峰高原での吟行企画が催され、高峰吟行は定員があふれるほどの人気となつた。今年は参加者が百三十人ほどと昨年の七割程度であったが、人数が少ない分密度の濃い句会になつた。

俳句祭最終回

—主催者の思い—

まらない一年だよね」と俳句祭の実行委員長である塩川さんは言う。

今年の十一月に、毎年日盛俳句祭が行われてきた市民会館が建て壊しになる。また同じ会場で開催することはできないが、さらに参加者が増え活発な俳句祭になることを望む。俳句祭は地元あつての行事である。「地元がない限りこの俳句祭は存続しない。もつと地元の人にも参加してほしい」主催者の願いである。

三日間かけて様々な場所を周り、じっくりと俳句を詠み、句会中心に行われるのがこの俳句祭の魅力である。また、小諸のどかな雰囲気と人々の温かさに触ることで心が休まる。



五回目をめざして

若い人から年配の方まで幅広い人が俳句を通して繋がっているのを見て、俳句の魅力を知れた気がする。また来年も、この場所に帰ってきた

立場に立った吟行地巡りを目指したい」と語っていた。「こもろ・日盛」は来年でついに記念すべき俳句祭



2012年
(平成24年)
7月29日
日曜日

てあるまん編集部

発行所: 小諸市民会館
komoroman@yanotica.net

第十七号

ロマン小説
最終話

彼は、こちらのバス停に向かって走つてくるようだつた。私はなんだか急に恥ずかしくなつて、「をふせた。雨で濡れた服がべつりと肌にまとわりついて気持ち悪い。なんだか、疲れた。ここ最近受験勉強のせいもあって夜もろそくに眠れていなく、じめっとした尾さのせいでご飯を食べる気にもとなりならない。体が鉛のように重くてだるい。私は家を飛び出しことを後悔しはじめていた。ここなどころでたたずむよりは冷房のきいた自分の部屋にいた方がまびましである。

私はふと顔をあげた。すると彼の姿はもう見当たらなかつたが遠くの方でパシャパシャと音を立てて走る音が聞こえた。がつから

して、肩をすとんと落とした。私は心のどこかで彼がここに来てくれることを期待していたのだ。でもそんなはずもなく、足音は遠のいていくばかりである。彼はそんなに足早に急いで一体どこへ向かうというのだろうか。しかもこんな雨の日に。やがて足音も消え、さーっと雨の降る音だけが残った。

結局その後、私はとぼとぼと家に帰った。母のいない家はすっかり静まりかえり、しんとしていた。結局母の話を最後まで聞いていたかった。でも、続きを聞く勇気は私にはない。もうこのことはそのことは母が帰ってきたら笑顔でおかえりなさいと言つてあげよう。いつかまた本当のことを言つてくれればいい。そう思うとともに、私は彼に対する気持ちもそつと胸の奥にしまうことを決意した。そんな夏の終わり。



川村

五回目。小山さんは、五回目が要であると言った。「どうしてもマンネリ化をしてしまうので、新たな工夫が必要」だ。この肝心な五回目で、なんと今までの会場が無くなってしまう。次は駅に近い野木小学校を舞台にしようと考えているそうだ。

来年、新たな動きを見せる「ころ・日盛り俳句祭」。これからも是非期待をしていただきたい。

(川村)

カメラを持ったわたし

「帽子をかぶって、カメラを首からさげて走る」のがいつしかここで定番スタイルになつた私は、ころ・日盛俳句祭に第一回のときからおじやましていて、今年で四回目（加藤文俊研究室OBとなつてからは初）の参加となつた。「明眸皓歯」と句に詠んでいただいてから、もう三年が経つたとはとても信じられず、つい昨日のことのように思つてしまふ。

日盛俳句祭に毎年訪れるたび、だんだんと顔も覚えてもらえて、あちらこちらで「写真撮つて！」と言つてもうかることがすごくうれしくて、素人の私でも恥ずかしながら、ここではすっかりカメラマン気取り



になつてしまうのである。

いつもやさしく、親しみを持つて接してくれるたくさんの方々に、少しでもなにかお返ししたいという思

いをこめて、今回、新たに試みとして撮影した写真をその場で編集、印刷し、受付の横に掲示させていた

だくこととした。ほんの少しでも、ここでできごとや思い出を目につけるかたちにし、皆さんに楽しんでもらえるもの、みんなのすてきな表情を残したいと、シャッターを押す指にもつい力が入る。

吟行中、句会中の様子はもちろんのこと、「俳句手帳と私」シリーズと題して、ご本人に俳句手帳を手に持つて撮影させていただくこともしている。これらの写真を話のネタに、日盛俳句祭での三日間をぶり返つていたけたらうれしい限りである。（森部）

全身で感じた小諸の夏

今回初めてここ小諸に訪れた。木曜日の夜に到着し金曜日から3日間俳句祭のお手伝いをさせていただきながら、この「こもろまん」の制作にあたつた。

青々とした木々に囲まれ、どこか懐かしさを感じまち並み。汗を拭いながら、氷水で冷やされたキュウリや

いつものこもろ

「今年は特に暑いですね」なんてことが言えるくらいに、夏の小諸を知つたつもりになつている。

小諸に来るのは、四回目。お話をしたことがなくとも、顔を知つてい

る人に会うだけで、懐かしい気持ちになる。「去年もいたよね」と言つてくれると、同じ懐かしさを感じてくれる気がして、嬉しい。

大学を卒業し、OBとしておじや



ましている立場だが、席が空いているということで吟行バスに同乗させられた。俳句祭に参加するのは二回目で、佐久平からいらしているトマトにかじりつく。昼間は日差しが強くうだるような暑さだったが、夕方になると涼しい風が吹いていた。小諸は季節を直接目で、肌で、味覚で感じができるまちだと思う。この環境が人を集めのだろう。私も全身でめいっぱい夏を感じた。

そんな素晴らしい環境の中で、慌ただしく作業に追われながらも、あたかく声をかけてくださる皆さんとお話をさせていただいたり、真剣に句を詠まれている姿を見させていただいた。人と環境、本当に居心地が良い。まだまだ帰りたくないと思つてしまふほど。4日間とても充実した日々を過ごした。

いつもは与良館に宿泊していたが、今年はなんと毎年お世話になつ

「こもろまん」は、日盛俳句祭のようすを伝えるかわら版で、今年で四年目を迎えてます。発行は毎夕の二回で、最新号はできあがるとすぐに市民会館入口に設置されるので、ぜひお手に取つてみてください。

俳句祭の終わりとともに、「こもろまん」はすこしお休みになり

<http://vanotica.net/komoroman/>



ますが、また来年、この季節にお会いできればと思います。一号から最新号まで、全てのバックナンバーはウェブにまとめてありますので、こちらもよろしくお願ひいたします。

それでは、また！